

## 送別の辞

～激動期における社会保障研究者～

附属地域共生センター所長 加登田 恵子

### はじめに

田中耕太郎先生が本学に着任されたのは、1995年の7月、本学に社会福祉学部が開設された翌年の夏であった。

社会福祉学部開設に当たっては、文学部の改組転換を構想された岩田啓靖先生（後の学長）がまさに獅子奮迅のご活躍をされ、日本女子大学教授で日本社会福祉学会長の経験のあった一番ヶ瀬康子先生と、日本社会事業大学教授（のち同大学学長）で厚生労働省専門官の経験のあった京極高宣先生のお二人を学部開設の顧問として招き、両先生のお力添えを得て、全国からいわゆる「社会福祉のプロパー教員」が集められた。新学部が開設された当初は文学部教授会も継続しており、学部学生数も1年生のみで、むしろ文学部生の方が多いという状況であった。初代学部長となられた上田千秋先生は、「社会福祉学部」という新たな教育チームを形成して、学部の基礎固めをしようと色々と腐心されていた。翌年の夏、田中先生が着任されることとなり、いよいよ3年次から本格化する専門教育体制が整うこととなった。上田学部長が「今度、厚生省からバリバリの先生が来られることになったよ。しかも、地元山口出身だ。これで、社会福祉学部の政策系の布陣が整うね。」と嬉しそうにおっしゃったことを記憶している。

それ以降、田中先生は20有余年の長きに渡り、社会福祉学体系の主要な柱のひとつである「社会保障研究室」を担われ、また学部運営では学科長、学部長を歴任されるなど、まさに社会福祉学部の中枢に位置されていた。この度、田中先生が定年退職を迎えられることで、昨年来の団塊の世代の諸先生の御退職の波が一区切りするとともに、学部教育体制が大きな構造的転換期に入っていることを実感している。

長年社会福祉学部の主翼を担われていた先生が去られることを大いに心細く思うが、先輩のご功績から社会福祉研究者や教育者としての取組の姿勢を学び、さらに学部草創期のエトスを学部の教育チームの資産として受け継ぐことにより、今後の学部の新たな歩への糧としたい。

### 1. 地元山口からの飛翔

田中先生は、1950年地元山口市にお生まれになった、生粋の山口っ子である。山口県立山口高等学校を卒業の後、京都大学法学部に進まれた。1970年前後の世の中は、大阪で「日本万国博覧会」が開催されるなど華やかな動きが記憶される一方、全国の大学は所謂「大学紛争」により大荒れしていた時期であった。なお騒然とした雰囲気を残していたであろう学園生活の中でも、田中先生ご自身は自己を保たれ、「琵琶湖周航の歌」で有名な京都大学ボート部に属し、湖上での青春を謳歌されたと聞く。学生時代の体験は、大学人にとって、人格形成はもとより各自が目指す大学像を形成するにあたって大きな影

響を与えると聞くと、田中先生が、ホームページの社会福祉学部長メッセージに「来て良かったと思う学部を目指す」と表現されたイメージの背景には、ボート部での楽しい経験が彩りを添えていたのではないかと想像する。

## 2. 厚生官僚から大学教員へ

1974年には厚生省（当時）に入省されて以降は、厚生官僚として輝かしいキャリアを積まれた。勤務された部署は、水道環境部から業務局、児童局、保険局、大臣官房と多彩であるが、とくに社会保険庁の業務課、児童手当課、医療課、障害福祉課等は、まさに我が国の社会福祉制度の実体を直接的に動かす重要部局であるといえよう。田中先生はそこで気鋭のテクノクラートとしてもピューロクラートとしても活躍された。霞ヶ関で振るわれた敏腕官僚の力を、是非とも郷土山口に生かして欲しいと期待される声が、各所から上がっても不思議でない逸材であられたことは間違いなからう。

さらに、官僚としてのキャリアの中で特筆すべきは、事前の短期研修を踏まえ、1985年から3年間、在ドイツ連邦共和国日本国大使館一等書記官として外務省に出向され、ドイツの社会政策・社会保障制度等について研修されたことである。そこで得られた知見は、大学に來られてからの研究活動のベースとなり、我が国の社会保障研究にドイツを複線とする国際比較の視点をもち込むという点で遺憾なく発揮された。

ドイツの社会保障等に関する論文業績は、別紙業績一覧の通り多数あるが、とくに『社会保障改革－日本とドイツの挑戦』（土田武史・田中耕太郎・府川哲夫編著、貝塚啓明・松田晋哉・橋本康子・駒村康平共著、ミネルヴァ書房、2008年）や『日独社会保険政策の回顧と展望－テクノクラートと語る医療と年金の歩み－』（幸田正孝・吉原健二・田中耕太郎・土田武史編著、ベルント・バロン・フォン・マイデル他共著、法研、2011年）は、少子高齢化が進む社会における社会保障制度の継続可能性についての根本論点を整理するとともに、現実の政策手法の課題を明確にすることで国民的論議を高めるという点で興味深い業績である。担当された授業科目としても、メインの「社会保障論」に加えて「国際福祉論」を担当され、とかくドメスティックな領域に偏りがちな社会福祉学部において貴重な国際派として、学生達の知的関心領域を大きく広げてくださった。

なお、田中先生が大学教員へと華麗な転身を図られた1995年から現在に至る20年間は、日本の社会保障制度の一大変革期であった。先生の研究業績を拝見すると、1980年代は医療費制度や医療保険に関連する主題から始まり、それを軸としながら1990年代からは介護保険・社会保険制度全般へ、さらに法制度の個別具体への適用過程でもあるソーシャルワークの接点に存する「権利擁護事業」へと展開されている。とくに1997年12月の介護保険法の制定と5年ごとの見直しを含めた改正プロセスは、超高齢社会である我国の本格的な社会的ケアシステム基盤形成期であることから、その渦中の研究としての意味は大きい。

## 3. 社会福祉学部長として

学部運営に関しては、山本圭介学部長の下での学科長の後、2006～2010年に第5代学部長を勤められ、その間私は学科長として学部運営のお手伝いをさせて戴くこととなった。

当時は、学部開設10年目における大幅カリキュラム改訂や、独法化に伴う預かり金の精算作業等にも取り組まれたが、重大イベントは何と言っても2007～10年に文科省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択されたことであろう。本事業は、大学全入時代における大学改革を強力に進めるために国が打ち出したもので、各大学がその生き残りをかける競争時代の幕開けとも言える時期の政

策であった。

本学部では「<重層的な学生支援教育>による福祉人材養成」というテーマを掲げ、学生に多彩な「人の出会い」を重層的に提供することにより「福祉の人間力の獲得」をすることを旨とする。これは、学部開設以来地道に積み上げてきた福祉実習教育を中核とする教育実践の特徴を改めて明確化し、カリキュラムの中に理論学習と実践教育を統合する場として一連の「演習科目」を構造的に位置づけたものである。幸運にも全国52大学等の一校に選ばれたが、多額の助成金を具体的なプログラムに展開し、効果的に運用するためには多くのエネルギーの集結を必要とした。事業の一つとして、講義のサブテキストとして活用できるブックレット・シリーズ（全13巻）を、学部教員全員が分担執筆して公刊し、田中先生には『ソーシャルワークと権利擁護』（ふくろう出版）の巻の編著をご担当いただいた。「権利擁護事業」は、社会福祉士養成カリキュラムに新たに加えられたばかりであり、テキストとして纏められたものは全国的にもまだ珍しい段階であったと思う。

同じ特色GPの一環で、学部FDとして学部教員総出で萩や長門のホテルに向いて宿泊研修を行い、福祉教育や研究について夜遅くまで議論した。議論の合間に、皆が童心に戻ってレクリエーションに興じたことも、今となっては懐かしい思い出である。3年間にわたる特色GPの実施期間中、田中先生は学部長として御後援いただいた。

#### 4. 学生への薫陶

大学教員としての醍醐味は、何と言っても学生との触れ合いである。田中先生は平素、学生への積極的介入については「個別支援の専門家ではないから」とおっしゃり、あえて慎重な姿勢を示されていたようにも見受けられるが、それは先生の謙遜であろう。先生の薫陶ぶりを垣間見るために、田中ゼミの1期生である寺河奈美さんからの届いたメッセージを紹介したい。

『ピンクのセーターに一目惚れした田中先生の初講義も、もう20年近く前になるのですね。あのときは、こんなにも長くお世話になり続けるとは思ってもみませんでした。』

学生時代は生意気な発言をして、ずいぶん先生を困らせてしまいました。一期生で先輩がいない不安を先生につけていたのかもしれませんが。そんな私を叱ることなく、先生はニコニコと美味しいコーヒを淹れ、指導してくださいました。

卒業後も研究室におじゃますると、『おー、どうしたあ〜。』と絆纏とスリッパ姿で現れて、話を聴いてくださいました。振り返ってみれば、転職、転勤、退職、結婚など人生の節目には、いつも研究室で先生に報告してきたような気がします。体調を崩して悩んでいた時には、奥様が相談に乗ってくださったこともありました。とても感謝しています。これからも、あのピンクのセーターが似合う、素敵な先生でいてくださいね。』

田中先生、長い間、どうもありがとうございました。今後のますますのご活躍をお祈りいたします。